

Graham Greene の掌篇

“I SPY”について

河 野 庸 二

序 論

この掌篇は1947年刊行の *Nineteen Stories* の中の一編である。但し、作者はその後1954年に、同短篇集中から2編を除き、新たに4編を加えて、*Twenty-One Stories* として再編成したものを出しているの、今日ではむしろ後者の中の一編というべきであろう。書かれた年代は明白ではないが、同集中の、同じく一少年を主人公とする *The Basement Room* が1936年作であることから推定すると、おそらくほぼ同じ頃の作品と思われる。作家グリーンのすぐれた資質について、筆者はかねて長篇 *The Power and the Glory* 等で、ある程度わかったつもりでいたが、計らずも、短篇の中でも最短の部類に入るこの掌篇によって、改めて作者の力量を再認識することになった。筆者の、この作品との最初の出会いは、1960年代末のアメリカの high school 用教科書 *America Reads* の中であつた。一読して興味を覚え、再三再四読み返していたが、その後イギリスの中等学校用教科書である *Mainstream English* (1979年版) の中でもこの掌篇と再会したりするうちに、極めて短いながら、並み並みならぬ作品と思われるようになった。もちろん、わが国の大学用英語テキストにも採られてはいるが、わが国ではやはり、「第三の男」、「落ちた偶像」^(注)のような名作の影に隠れてしまっている感が拭いきれないと思う。タイトルに込められた二重性といい、類なく緊密な構成といい、神技と唱えたいほどの高い完成度を示す、一少年の「目覚め」を描いたあたかも一幅の細密画のようなこの一編を、単独に取り上げて論じてみたいと考えるに至った次第である。なお、一つの試みとして、まず、作品の全文を1パラグラフずつ順を追って引用し(それが可能なほどこの作品は短く、また、それが必要なほど緻密なのである)、拙訳を添えたうえで、分析を試みることにする。

注) *The Fallen Idol* は *The Basement Room* が映画化されたときのタイトルである。

導入部（その1）、いびきをかく母親

Charlie Stowe waited until he heard his mother snore before he got out of bed. Even then he moved with caution and tiptoed to the window. The front of the house was irregular, so that it was possible to see a light burning in his mother's room. But now all the windows were dark. A searchlight passed across the sky, lighting the banks of cloud and probing the dark deep spaces between, seeking enemy airships. The wind blew from the sea, and Charlie Stowe could hear behind his mother's snores the beating of the waves. A draught through the cracks in the window-frame stirred his nightshirt. Charlie Stowe was frightened.

（イタリックは筆者。以下同じ。）

（チャーリー・ストウはベッドから抜け出す前に母親がいびきをかくのが聞こえるまで待っていた。それからも彼は用心して歩を進め、抜き足指し足で窓際まで行った。家の表側は入り組んでいた。それで母親の部屋に灯りがともっているのを見ることができたのである。だが今は窓は皆暗かった。サーチライトが空を横切って雲の峰を照らし、雲の間の暗い空間を探って敵の飛行船を捜していた。風は海から吹いていた。チャーリー・ストウは母親のいびきに混じって遠く波の打ち寄せる音を聞くことができた。窓枠のひび割れから吹き込む隙間風に寝間着がなびいた。チャーリー・ストウは怖くなった。）

すぐれた作者は余計な説明はしないものである。ここには、主人公が臆病な少年で、母親がおかみさんタイプの女傑らしいこと、時代は第一次大戦中であることがそれとなく読み取れるように描かれている。風向きの関係で、かなり遠方の音が聞こえることがある。物語の舞台は、風向き次第では打ち寄せる波の音も聞こえてこようという程度に内陸部の、戦時中とはいえ直接には空襲の対象にならない中小都市であろう。（のちにノリッジであることがわかる。）

導入部（その2）、対称的な両親像

But the thought of the tobacconist's shop which his father kept down a dozen wooden stairs drew him on. He was twelve years old, and already boys at the County School mocked him because he had never smoked a

cigarette. The packets were piled *twelve* deep below, Gold Flake and Players, De Reszke, Abdulla, Woodbines, and the little shop lay under a thin haze of stale smoke which would completely disguise his crime. That it was a crime to steal some of his father's stock Charlie Stowe had no doubt, but he did not love his father; his father was unreal to him, a wraith, pale, thin, indefinite, who noticed him only spasmodically and left even punishment to his mother. For his mother he felt a passionate demonstrative love; her large boisterous presence and her noisy charity filled the world for him; from her speech he judged her the friend of everyone, from the rector's wife to the "dear Queen", except the "Huns", the monsters who larked in Zeppelins in the clouds. But his father's affection and dislike were as indefinite as his movements. Tonight he had said he would be in Norwich, and yet you never knew. Charlie Stowe had no sense of safety as he crept down the wooden stairs. When they creaked *he clenched his fingers on the collar of his nightshirt.*

(しかし梯子段を十二段降りたところに父親が経営している煙草店のことを思うと、足が止まらなかった。彼は十二歳だった。それで、すでに中学校の学友たちが、まだ一度も煙草を吸ったことがないというので、彼のことをからかうのだった。ずっと下まで降りて行けば、煙草の箱は十二段に積んであった。ゴールド・フレークにプレイヤーズ、デ・レスケ、アブドゥラ、ウッドバインズが。そして狭い店は彼の犯罪をすっぽりと包み隠してくれるはずの澱んだ煙のもやに包まれていた。父親の商売物を盗むのが罪になるぐらいのことはチャーリー・ストウとて知らぬはずがなかったが、彼は父親を愛していなかった。父親は彼にとって実体感が乏しかった。蒼ざめて、瘦せて、影の薄い、生き霊のような存在で、ほんの時たまにしかチャーリーの存在を意識せず、お仕置までも母親に任せるような始末だった。母親に対しては彼は熱烈で積極的な愛情を感じていた。母親の大きなこれ見よがしの存在感と、口やかましいばかりの世話焼きぶりが、彼の頭の中を占めていた。母親の口ぶりからすると、編隊を組んでやって来る、雲の中のツェッペリン号の中に潜む人でなしども、つまり「ドイツ野郎」だけは別としても、教区牧師の奥さんから「お妃さま」に至るまで、人は皆友達扱いという感じだった。しかし父親の方の好き嫌いはその行動と同様にはっきりしなかった。今夜

もノリッジにいるとは言っていたものの、どうだか知れたものではなかった。這うようにして梯子段を降りながらも、チャーリー・ストウは生きた心地がしなかった。梯子段がきしると、彼は寝間着の襟を固く握りしめた。

ここでまず気づくのは、明らかに意図的な、twelve または a dozen という語の多用である。まず、梯子段が12段、次にチャーリーの年齢が12歳、また、積み上げられた煙草の箱は12段である。12歳は teen-age になる直前の年齢であり、煙草の箱の12段はダース単位ということからすれば、いたって自然な数であるが、要するに作者は、13の一步手前の数としての12を、読者に印象づけたかったのではないか。ここで読者は、絞首台にのぼる階段が13階段であることを想起すべきである。

つづいて、存在感あふれる、好き嫌いのはっきりした母親と、それとはおよそ正反対の、煮えきらない、実体感の乏しい父親が対称的に描かれる。抱擁力のある母親は、体格の方も、瘦せて、蒼ざめた父親とは真反対なのであろう。少年が、おそらく肩をすくめて怖がるときのしぐさであろうが、着物の襟を固く握りしめるという性癖は、この作品の重要な伏線の一つになっている。

導入部（その3）、光と闇

At the bottom of the stairs he came out quite suddenly into the little shop. It was too dark to see his way, and he did not dare touch the switch. For half a minute he sat in despair on the bottom step with his chin cupped in his hands. Then the regular movement of the searchlight was reflected through an upper window and the boy had time to fix in memory the pile of cigarettes, the counter, and the small hole under it. The footsteps of a policeman on the pavement made him grab the first packet to his hand and dive for the hole. A light shone along the floor and a hand tried the door, then the footsteps passed on, and Charlie cowered in the darkness.

（階段をいちばん下まで降りきると、そこはもう狭い店の中だった。暗すぎて先が見えなかったし、スイッチにさわるときの勇気もなかった。30秒間ばかり彼はがっくりして階段の最下段に腰をかけ、あごをかかえ込ん

でいた。そのとき規則正しいサーチライトの動きが、高窓に反射したので、少年はこのときとばかり、積み重ねてある煙草とカウンター、およびその下の小さな穴の位置を脳裏に焼き付けた。歩道を歩く巡査の足音を聞いて、彼は手当たり次第に一箱掴んで穴に飛びこんだ。一筋の明かりが床に射し、ドアに手がかかって施錠が確かめられ、それから足音は過ぎて行き、そしてチャーリー・ストウは暗闇の中でうずくまっていた。))

この短いパラグラフには、臆病者の胆を冷やす真の闇と、その闇を一瞬照らす2種類の明かりが極めて印象的に描かれている。サーチライトの光の動きと、それに合わせる少年の敏捷な動き、家々の施錠を確かめる夜行巡査の行動が、緩急のリズムをつけて、光と闇の対比の中で活写されている。

導入部 (その4)、背伸びする年頃

At last he got his courage back by telling himself in his curiously adult way that *if he were caught now there was nothing to be done about it, and he might as well have his smoke*. He put a cigarette in his mouth and then remembered that he had no matches. For a while he dared not move. Three times the searchlight lit the shop, while he muttered taunts and encouragements. *'May as well be hung for a sheep,' 'Cowardy, cowardy custard,' grown-up and childish exhortations oddly mixed.*

(やっとのことで彼は、例によって奇妙に大人びた調子で、今もし捕まったらどうしようもないのだから、いっそのこと一服吸ってやれと自分に言い聞かせて、勇気を取り戻した。彼は煙草をくわえたが、今度はマッチが無いのに気がついた。しばらくの間彼は体を動かす勇気もなかった。サーチライトは三度店を照らし、その間彼はあざけりや勇気づけの言葉をつぶやいていた。「毒食らわば皿までだ」とか、「弱虫やーい」などと、ませた言い方や子供っぽい言い方を変な具合に混ぜこぜにして。)

この段落は思春期に入った少年の微妙な心理の揺れを鮮かに浮き彫りにしていると同時に、重要な伏線ともなる一節である。学友にからかわれたくないばかりに、父親の店から煙草を盗み出そうとする行為自体、大人になり

たいという衝動の現われに他ならないが、どんなに無理をしても、所詮大人にはなりきれないのである。(そのことはここでは、煙草は手に入れたが、肝腎のマッチがないという、ちぐはぐな状態によって象徴的に表わされている。) また、grown-up and childish exhortations oddly mixed. のくだりは、一人の中に大人と子供が同居する思春期の特徴を端的、かつ的確にとらえている。

展開部 (その1), 父親と二人の男

But as he moved he heard footfalls in the street, the sound of several men walking rapidly. Charlie Stowe was old enough to feel surprise that anybody was about. The footsteps came nearer, stopped; a key was turned in the shop door, a voice said, 'Let him in,' and then he heard his father, 'If you wouldn't mind being quiet, gentlemen. I don't want to wake up the family.' There was a note unfamiliar to Charlie in the undecided voice. A torch flashed and the electric globe burst into blue light. The boy held his breath; he wondered whether his father would hear his heart beating and *clutched his nightshirt tightly* and prayed, 'O God, don't let me be caught.' Through a crack in the counter he could see his father where he stood, *one hand held to his high stiff collar*, between two men in bowler hats and belted mackintoshes. They were strangers.

(ところが動きだすと、表の通りで足音がした。何人もの人が急ぎ足に歩く足音が。チャーリー・ストウはあたりに誰かがいるだけで驚きを感じる年頃だった。足音は近付いてきてはたと止まり、鍵が店のドアに差し込まれて、人声がした。「入れてやれ。」それから父親の声が聞こえた。「なるべくお静かに願います。家族を起こしたくないもので。」いつものきはきしない声の中に、チャーリーには聞き慣れない調子がこもっていた。懐中電灯が閃き、電球が青く点った。少年は息をのんだ。彼は胸の高鳴りが父親に聞こえはすまいかと気が気ではなかった。それで彼は寝間着の襟首を固く握りしめて祈った。「ああ、神様、どうか捕まりませんように。」カウンターの割れ目から彼には父親が、山高帽をかぶってベルト付きの防水外套を着た二人の男に狭まれて、片方の手で、高い、きっちりした襟を掴んで立っている姿が見えた。彼らは知らない人たちだった。)

多感で繊細なチャーリーは連行されてきた父親の声の調子がいつもとは微妙に違うのに気付く。もっとも、チャーリーにはこの二人の男が何者であるかはわかっていない。男たちの服装と言動から、彼等が刑事であろうことは、読者にはじゅうぶん察しはつくのであるが。この作品が、終始一貫して十二歳の少年の視点から書かれていることに注目したい。店の中が明るくなって、見つかることを恐れる少年は思わず寝間着の襟首を握りしめる。二人の男に挟まれて立っている父親も襟を掴んでいるのだが、チャーリーはまだこの時点では、父親のこのしぐさの自分との類似に気付いていない。

展開部（その2）、かさかさの声

‘Have a cigarette,’ his father said in a voice *dry as a biscuit*. One of the men shook his head. ‘It wouldn’t do, not when we are on duty. Thank you all the same.’ He spoke gently, but without kindness; Charlie Stowe thought his father must be ill.

‘Mind if I put a few in my pocket?’ Mr. Stowe asked, and when the man nodded he lifted a pile of Gold Flake and Players from a shelf and caressed the packets with the tips of his fingers.

（「煙草いかがですか。」父親はビスケットみたいにかさかさの声で言った。一方の男が首を振った。「だめだ。勤務中はいかん。気持ちはありがたいが。」男の口調は穏やかだったが、やさしさがこもっていなかった。チャーリー・ストウは父親が病気に違いないと思った。

「二三箱ポケットに入れてもよろしいでしょうか。」ストウ氏は尋ねた。そして男がうなずくと、父親はゴールド・フレイクとプレイヤーズを棚から下ろして、包みを指の先で撫でさすった。）

ドイツのスパイとして逮捕されて、気の小さい父親は恐ろしさのあまり緊張しきっているというのが実情なのだが、事情がわからないまま、少年はただ、父親の口調に異常を認め、病気なのだと断定する。また一方では男の口調の冷たさをも敏感に感じとっている。しかし、商売物の煙草を手にとり、しみじみとおしむ父親のしぐさも、チャーリーには理解できないであろう。dry-biscuit という連想も、少年らしさを巧みに出している。

展開部（その3）、似たもの同士

‘Well,’ he said, ‘*there’s nothing to be done about it, and I may as well have my smokes.*’ For a moment Charlie Stowe feared discovery, his father stared round the shop so thoroughly; he might have been seeing it for the first time. ‘It’s a good little business,’ he said, ‘for those that like it. The wife will sell out, I suppose. Else the neighbours’ll be wrecking it. Well, you want to be off. *A stitch in time.* I’ll get my coat.’ ‘One of us’ll come with you, if you don’t mind,’ said the stranger gently.

‘You needn’t trouble. It’s on the peg here, I’m all ready.’

The other man said in an embarrassed way: ‘Don’t you want to speak to your wife?’ The thin voice was decided. ‘Not me. *Never do today what you can put off till tomorrow.* She’ll have her chance later, won’t she?’

‘Yes, yes,’ one of the strangers said and he became very cheerful and encouraging. ‘Don’t you worry too much. *While there’s life...*’ And suddenly his father *tried to laugh.*

（「さてと、もうこうなったらどうしようもありませんね。煙草でも吸わせてもらいますかな。」と彼は言った。一瞬チャーリーは見つかると思った。父親が店の隅々までしげしげと見渡したのである。まるで店を初めて見る人のようだった。彼は言った。「これでも、好きな者にはなかなか乙な商売でしてね。家内としては売りに出すのが賢明でしょうな。さもないと、近所の連中が寄ってたかってぶっ壊してしまうでしょう。さてと、ぐずぐずしては居られませんね。時は金なりだ。ちょっとコートを取って来ます。」

「よろしければ我々のいずれかが同行しよう。」ともう一方の男が穏やかに言った。

「それには及びません。ここに掛けてあります。これで仕度ができました。」

「奥さんに話さなくてもいいのかね。」もう一方の男がどぎまぎして言った。「いや、結構です。『明日できることは今日するな』ですよ。またの機会もあることでしょう。」か細いながらも声はきっぱりしていた。

「そうだ、そうだ。」と一方の男が言って急に陽気になって元気づけを言った。「あまり気にしないことだ。命あっての何とやらだ。」すると父親は突然途中まで笑いかけた。）

ここで父親は、「こうなったらしかたがありません。煙草でも吸わせてもらいますか。」と、先刻チャーリーが勇気づけに、自分に言い寄せたのとそっくりのことをいうのだが、見分かるのを恐れるチャーリーにはそれに気付く余裕がない。父親は「まるで初めて来た人のように、しげしげと」店の中を見回したのである。逮捕されたスパイを待ち受けるものは極刑である。彼が敵国のスパイだとわかれば煙草店も打ち壊しにあうことは必定である。煙草も吸い納め、店も見納めという感慨と、やり切れない絶望感、そしてそれを打ち消そうとする淡い期待の交錯する微妙な心理がダイアログを通して客観的に描かれている。しきりに諺を連発する性癖のお株を奪われて、思わず笑ってしまう父親の笑いが、途中で凍結してしまう一節の描写は悲痛である。

結末、覚醒——タイトルの意味するもの

When the door had closed Charlie Stowe tiptoed upstairs and got into bed. He wondered why his father had left the house again so late at night and who the strangers were. Surprise and awe kept him for a little while awake. *It was as if a familiar photograph had stepped from the frame to reproach him with neglect.* He remembered how *his father had held tight to his collar and fortified himself with proverbs*, and he thought for the first time that, while his mother was boisterous and kindly, *his father was very much like himself, doing things in the dark which frightened him.* It would have pleased him to go down to his father and tell him that he loved him, but he could hear through the window the quick steps going away. He was alone in the house with his mother, and he fell asleep.

(ドアがしまるとチャーリー・ストウは爪先歩きで二階に上がり、寢床に潜り込んだ。彼は父親がこんな夜更けになぜ、また出掛けて行ったのか、また、あの見たことのない男たちは誰だろうかと頭をひねった。驚きと畏敬の念とで、彼は暫く眠れなかった。まるで、お馴染みの写真が目を掛けてもらえないのをとがめに、額縁から抜け出して来たような感じだった。彼は父親が、襟を固く握りしめて怖さをこらえ、諺を並べたてて自らを勇気づけていたことを思い出した。そして彼は初めて、母親の方は騒々しくて世話好きなのに、父親の方は自分とそっくりで、怖

いくせに暗闇の中でこそこしているのに気がついた。下に降りて行って、父親に「お父さん、好きだよ。」と言ったなら、父親は喜んだであろうが、足速に歩く足音が遠ざかって行くのが窓越しに聞こえていた。彼は家に母親と二人きりだった。そして彼は何時しか寝入ってしまった。)

おそらく二度と帰って来ることはないであろう父親の運命をチャーリーは知るよしもなかったが、彼はここで覚醒することにより、精神的に大きな飛躍をとげることになる。そもそもこの作品のタイトルになっている I spy は hide and seek (かくれんぼ) で、隠れている子を見つけた時に鬼が叫ぶ言葉である。したがって、文字どおりの意味は「見つけたぞ。」であるが、それは取りも直さず Eureka! の意味にもなる。同時にまた、「私はスパイ」という含みもあるわけで、極めて巧妙なタイトルと言える。ちなみに邦題を「かくれんぼ」とするのも意味深長でおもしろいであろう。父親が去ってから、寢床にもどったチャーリーは初めて自分と父親との明らかな類似性に思い当たるのである。父親も襟を固く握りしめて怖さをこらえ、諺を並べたてて、自らを勇気づけていたではないか。そもそも、怖いくせに暗闇の中でこそこする性癖自体父親そっくりなのである。これほど歴然とした事実を見落としていた少年の歯がゆさを、作者はまたしてもみごとな比喻によって表現している。It was as if a familiar photograph had stepped from the frame to reproach him with neglect. の一節からは、十二歳の少年の実感が生々しく伝わってくる。

結 論

作品の完成度からすると、この掌篇などはまさに完璧という言葉が当てはまる。19編ないし21編の集中にひっそりと収まっているが、筆者の見た限りでは、これほど緻密な作品は、元来緻密な作品を書くグレアム・グリーン の作品の中でも異例と言える。作中に使われている諺の扱い方を例に取っても、作者がいかに神経を使っているかが分かるはずである。

May as well be hung for a sheep. はもちろん完全な形ではない。正しくは One may as well be hanged for a sheep as for a lamb. であろうが、少年のうろ覚えとも解釈できないことはない。A stitch in time. これは言うまでもなく、A stitch in time saves nine. の前半であるが、ここでは一ひねりして、

むしろ Time is money. の意味で使っている。また、作者はお馴染みの Never put off till tomorrow what you can do today. を裏返しにして、Never do today what you can put off till tomorrow. として用いている。切羽詰まった父親の、精一杯のジョークと解釈すれば、いっそう悲痛な味わいが出る。そしてもう一つ、While there's life… (いうまでもなく、While there's life, there is hope. の前半であるが、) を、作者は一方の刑事に言わせている。前にも指摘したとおり、やたらに諺を並べたてるチャーリーの父親のお株を奪ったわけで、緊迫した状況の中でもユーモアを忘れぬイギリス人の真骨頂というべきであろう。父親もつい引き込まれて笑ってしまうが、その笑いは悲痛にも途中でこぼってしまうのである。

グリーンが自作を「純文学」と「娯楽作品」とに分けているのは(正確には「自作の novel のうちで娯楽的要素の濃いものを“entertainments”と称しているのは」である)周知の事であるが、この掌篇は両者の持つ要素を兼ね備えながら、内容的には大きく純文学側に傾斜した作品と言えるであろう。

使用テキスト

- 1) J R C Yglesias & L E Snellgrove, *Mainstream English, Olevel Stage*, Longman 1979)
- 2) Robert C. Pooley, general editor, *America Reads, England in Literature*, Scott, Foresman and Company, 1968)

(両テキストを比較対照したところ、前者の場合、boys at the County School の the County を落としているのに気付いた。それ以外の点では両者には全く異同はない。)